

源氏七代之武備  
前古平 記 賴信 賴義 義家

陸奥守兼法皇所  
秋早世  
五平  
義家

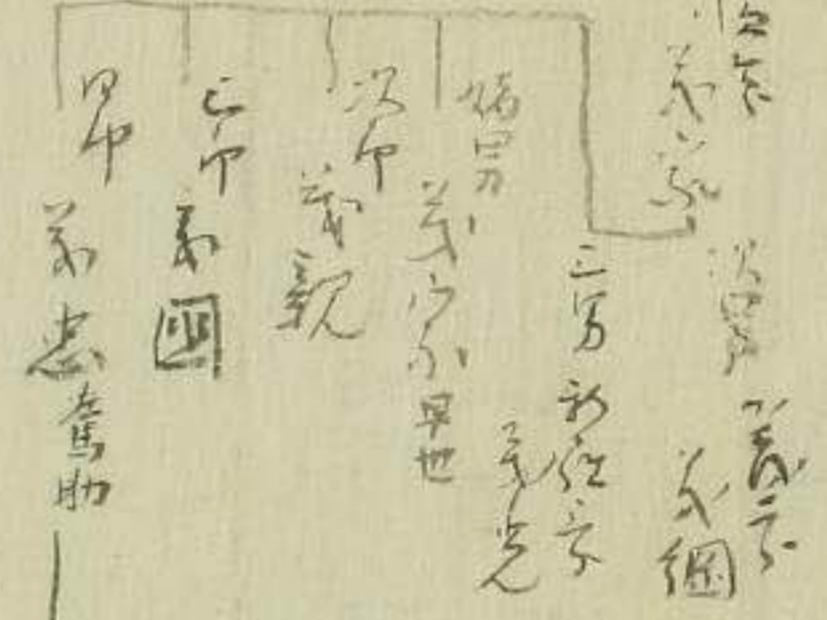
滿中  
三男  
賴光

滿仲  
左衛門  
人

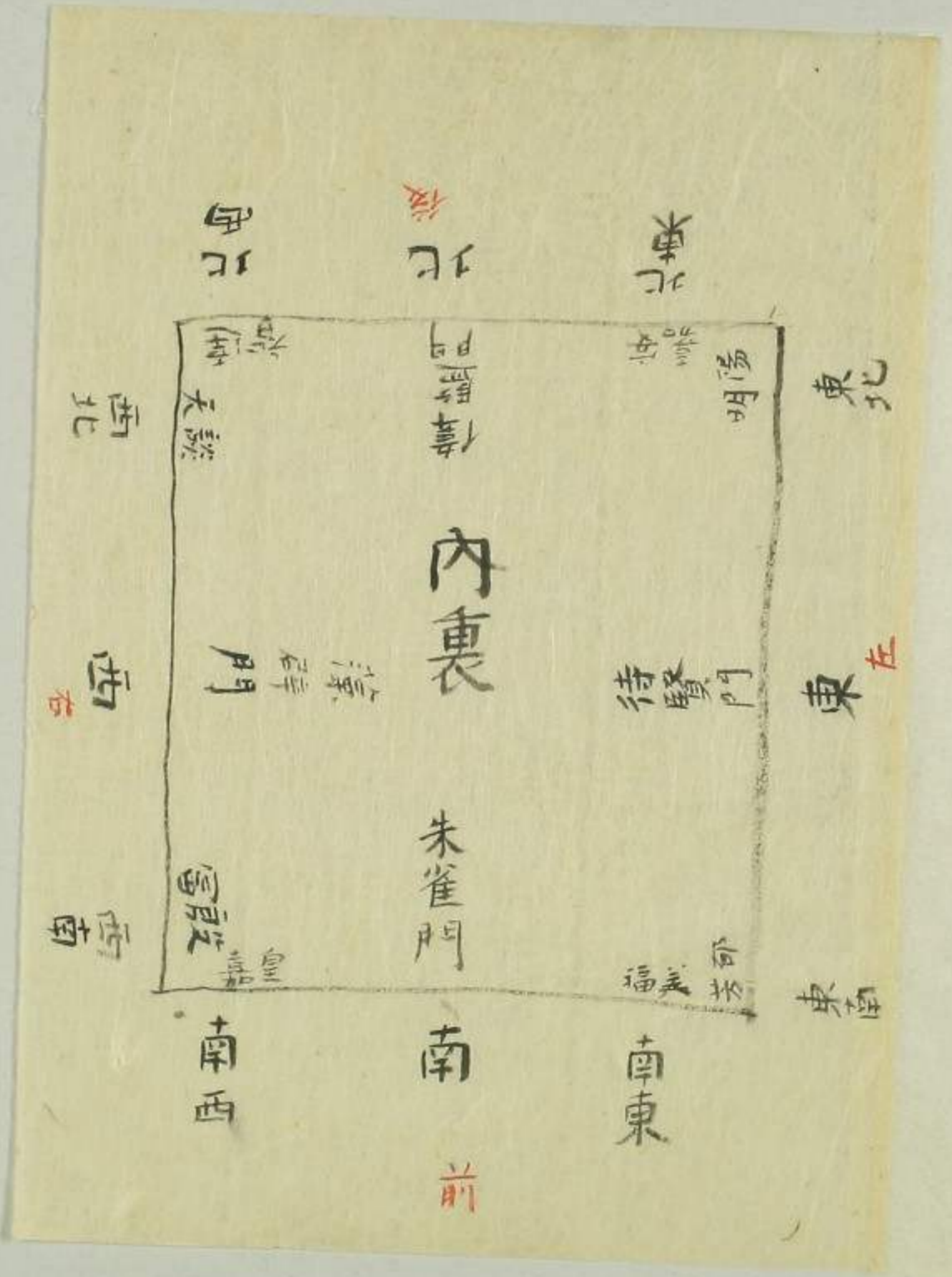
賴家  
賴基

永承六年六月  
女子

女子



女子  
賴家  
賴基



Handwritten notes and a small sketch on the right page. The text is written in vertical columns from right to left. It appears to be a commentary or description related to the architectural plan on the left page. There are some faint sketches and diagrams interspersed with the text.

Notes include:

- 東陽門 (Dongyang Gate)
- 待賢門 (Dai Xian Gate)
- 朱雀門 (Zhuque Gate)
- 漢祥門 (Han Xiang Gate)
- 內裏 (Inner Palace)
- 明陽門 (Mingyang Gate)

七十七代後白河院御宇

保元元年七月鳥羽法皇山明

清

藤頼長内覽を止すは故

當今を恨み宗徳新院をすめて乱を起し

に頼る京中大子隆勳を関白忠通源義朝平清感源頼政等内裡を

守護をた府頼長義朝の父を義法感が叔父忠正等、新院の御所を

系る七月十日の夜義朝法感と將りて白河殿を攻む時を為義乃

八男為朝武勇絶倫ありを補てこれを防ぐ義朝法感等と謀りて

よりて穴を放ちて白河殿を焼新院の軍つひに敗る頼長矢に中て死を

新院を遷す國(遷)し為義父子八人頼長男子三人及び忠正等を誅す為朝

一人を剛勇を惜み伊豆の大嶋一流を

一人を剛勇を惜み伊豆の大嶋一流を

一人を剛勇を惜み伊豆の大嶋一流を

同二年 俊成千載集を撰む

同三年 八月天皇讓位

同四年 此年の四月改元ありて平治といふ

七十八代

二條院 後白河帝(白)皇子

右衛門督藤信頼君寵を誇り大將の任を乞む少納言信西を阻む

信頼は信西を殺さんと欲し我朝をからざる我朝も又平氏を滅ぼすの

心あり因て法感能野系源の隙を幸として乱を作し三條殿を放火し

天皇を廢し上皇を押しめ信西を遣放逐し愆逆をある時平清感能

野の路にそむて亂を起す途より引去す十二月廿六日天皇ひそく清感が

六波羅の館に遷幸上皇仁和寺に幸す翌廿七日清感嫡子重盛を

大將して信頼義朝を討む我朝嫡子我平大子奮戦し小勢を以て

重盛が五百餘騎を破るに續く我朝勢は弱し遂に敗北して我朝は

東國に走り信頼は生捕して誅す伏しこれを平治の乱といふ

翌年正月改元ありて永曆ト云







宇治川軍者兩度アリ始ハ

治承四年庚子四月賴政カ之叛反時也

此叛反者平清盛カ之我儔法外ニ誘ホコレルヲ

惡シテ可滅シ之ヲ為ニ高倉宮ヲ奉レ勸宮

先立サキタテテ軍ヲ起セシ也是源氏方ヨリ平家ヲ

可亡キスス軍ノ魁ケイヲシタル也然レ共未マニ時トキ至マリ

故軍不利リ而敗北シシ於平等院ニ父子

三人共ニ討死ス惜イ哉

次ニ宇治川軍者其時ヨリニケ年經テ

壽永三甲辰年正月木曾義仲ヲ追伐ノ為後

蒲冠者範賴九郎判官義經兩人

賴朝ノ命ヲ受テ發シタル軍也此朝於栗津原

此義仲追伐セラル正月九日軍也訣ハ義仲初ホコ木曾ノ

山山中ヨリ起テ加賀國砥並山俱利伽羅カ谷

塩野等ニ於テ一旦平家ニホ勝シ込シテ

事ハヨカ成リシカ共夫ヨリシテ後義仲ホコ討テ

京都シ亂暴スル事甚シ仍之是ヲ

鎮メシガ為ニ範賴義經兩人向テ之ニ追

伐セシ也

此時義經廿五歲

佐々木四郎高綱廿五歲 梶原源太景季廿三歲

兩人宇治川ヲ渡シテ先陣ヲ爭ヘリ

畠山次郎重忠廿一歲



谷本日記 平日 諸人 旅 入 旅 入 旅 入 旅 入

武邊 咄 聞書 卷之二

太田道灌古哥ニヨリテ汝ノ遠近ヲ推量セン事  
武邊咄聞書卷之二

上総玉庭南城へと杉定政あり。何時人救を夜推し  
よる其道山雁海あり。汝満る時山雁をひき出  
とに石壁を張るやも。人救換る。立政は方あそ  
人救を止め件の道汝乃干たる時山雁を除く。遠干  
汝を推へしと。汝干なるとして。お見を遣はる。小見切  
おきか。汝のちり。立政の家。太田持資入道。道  
灌我寫見て。あんと。紫出。其新まも。行ぞ  
系度し。汝干。中。官人救あり。中といふ。別人救。推ゆ  
汝干て。遠干。汝を安し。と。推し。立政道灌子。向て。示  
まで。系。ひ。ひ。汝の干。は。と。見る。事。い。か。と。問。答。道灌  
中。い。は。た。あ。り

遠く。わ。り。ち。く。ち。る。を。の。演。と。も。あ。ま。は。汝。乃。ち。干。と。い。は。る  
と。中。い。か。を。お。も。う。そ。ろ。ぐ。と。遠。く。聞。し。い。有。汝。の。干。た。る。を。推。し  
云。た。る。と。な。り



日本書紀

口決

忌部正通

鈔

ト部兼俱

神代合解

講義

大外記環翠

成恩寺殿ノ纂疏

藤兼良丸

兼俱曰物惣メ日本紀三十三卷也日本記ト云ハ通号シ云神代上云神代下ハ別カテ也第ニ卷ヲ神武紀ト云フ自三到三十三卷人皇四十一代ノ事ヲ紀スルヲサレ程ニ天地人ノ三オト次第スルヲ神代ニ有シ一ニ以テ神代是ハ神代三年紀ヲ立夏有圍ヨリ西足意年救治セラリ以テ第クシ立リニ目縁ノ神代今日ノ神代ヲ云心ト云天神ニ通スルノ心ニ形ハ無リ天ニカメテ無リ心形無メ七情備ル然ハ一身ノ上ニ取程ニ目縁神代ソ

環翠曰神代ハ書ト云イ神武ヨリ持統ニテ人皇ノ紀ト云ヘシ日本名十四アリ其六ハ吾朝ハカリニ云也セハ大座ニモ云名也纂疏三トアリ日本ト云シメラレ又也

又曰鷄ヲ八音ノ鳥ト云ハ丑ノ算道ニハト云程ニ丑ノ時ニ鳴鳥ト云心也

日本書紀  
神皇正統記  
皇極經世一  
皇極經世二  
皇極經世三  
皇極經世四  
皇極經世五  
皇極經世六  
皇極經世七  
皇極經世八  
皇極經世九  
皇極經世十  
皇極經世十一  
皇極經世十二  
皇極經世十三  
皇極經世十四  
皇極經世十五  
皇極經世十六  
皇極經世十七  
皇極經世十八  
皇極經世十九  
皇極經世二十

六十八代  
後一條院寬仁四年庚申 関白道長法成寺及び  
二條院を建てよつて西宮の関白と稱す

七十二代  
白河院 應徳三年丙寅 白川の所を造り又鳥羽殿  
を造り城南離宮と号す

七十三代  
堀河院 寛治七年癸亥 義家の弟加茂次郎  
羽羽下向して群賊を平らぐ

同 康和二年庚辰 義家の長男対馬守  
罪あり出雲國に死流せしむ

同 嘉永二年丁亥 出雲國の流人義親むかひ  
平正盛勅命を蒙て二進を討伐す白ふ

七十四代

鳥羽院 天仁元年戊子 正月平正盛源義親を  
誅す時義親の弟義忠義家の家督たるべきに  
叔父義光と不和を以て義光はそに藤原三郎を  
義忠を刺殺し義親の男為義をして義家の養子とし  
世に義光の奸計あり事とあはれ義光の弟義綱は  
疑ふて罪を義綱に以て義綱はついに河内國  
山崎に遁る時を為し武蔵院直を蒙り兵を率  
てこれを攻む義綱殺ひて降す 依渡に死流せしむ

○此羽皇年 丑八月源義家平す

清盛正盛が家ヲ相續せし也

六條王経基り五代  
伊豫守頼義

八幡太郎 義家  
加茂次郎 義綱  
新羅三郎 義光

義朝  
義綱

義家  
義光

假名書の保元平治物語の卷末結文にもく

義朝ハ鳥羽院清宇保安四年癸卯の年

生じて世に歳少く保元元年に忠節を以て

くんこうを家り朝恩を浴しけるが今度の叛

反子與して力を亡しに徳を共頼朝義経

二人の子をて兵衛佐二十四判官廿二歳まで

義兵を揚會社目的耻をすぎ二度家を

榮也かり頼朝ハ近衛院久安三年丁卯

の年誕生して義経ハ二條院平治元年己卯

の年生まされ二人共に孝悌の年壯人也中にと

頼朝平家を亡し天下を治めて文治のまめ

諸國を守護を居あつゆる所の庄園郷邦

に地頭を補して武士輩改いさめ廢たる改

起し絶ふ跡を繼て武家の棟梁に成征夷

將軍此院宣を蒙る卯ハ多東方三支乃

中乃正方うそ仲春を掌ふ柳ハ卯の木也

春の陽氣を得て天道惠乃眉を削き

營繁く榮ふまハ柳營此職ハ卯の年此

人ハ實便有する者哉

保元平治物語卷之終

足達藤九郎盛長之日記也

盛長私記曰建久十巳未年正月十三日征夷大將軍

右近衛大將源頼朝卿薨る行年五十三此卿

近衛院清宇久安四年四月廿日誕生武家權柄執テ保元也

兼俱曰 日本事紀錄

此書雖神語以漢字編之者神佛儒三教一致義也日本此訓有之義之日本ヲヤマトヨムハ義訓也義ヲテ云程也日本ト吾國ニ書ハ日神出生故也漢書六日出所程ト云義也大和國ト云也的ト云義アリのト云字照テ見也天地開闢ニツクシテキコトヲ云々倭ヤト云此字本也和字ワシト云テモ唯ヤトヨム也一山迹ノ義也言上古天地初分時ハ水土不乾百姓ノ居所モナイ程トテ高き山ニ居スルソ土不孔メ人迹アル間如此訓スソニ山止義也人居住止ト云ホトニ山止ルノ義也三山止義也山上ニ宮戸ノ前ハ唯家ノ一ニサハ家一間ニ戸ト云也巢ノ居鳥スノマワニメシ云也穴居ハナラホリテイタ云居ノ義也戸ト云日本ニテ日ハ亥ニ圓滿云冠月ハカクレカアルムアラシ此訓ハ不審也ヤトト云ハ吾國ノ惣名ソ吾國ニ有テ四之名也此國ノ人到漢土時汝國ノ名何ソト問ハ不解漢語ヲ吾國ヤト云多字ト和字ト音近間和國ト云歎トテ其ヨリ吾國ヲ和國ト云ソ漢アヤト云アマヲリ備タルヨリアヤト云義訓也和何ト声来近ソ万法根源ハ何字也天地開時ハアトヒラレタリ天地ノ開ル始モ何也自漢土名吾國ハ也一倭國ニ倭面國三和入國ノ四耶馬推五姫氏國ノ爰ニ姫氏ノ文帝ノ一サニ書ニ經被遊タノ斷髪ヲ文身ト云ト有リ文身ハ身ヲモトロストヨムスハミ入スミラスハ龍蛇ノカイツマカルト云ト有テ六枝葉國七君子國ハ日本國也此八名ハ和漢相通メ用之ソ又吾國ヲ所名者六也一豊葦原ノ千五百秋瑞穂之地ニ豊秋津洲秋津國神武天皇日本ナリヲ御覧見メトニバウト云虫ニ似ハ彼虫ヲ哥道モアツバトツカウソサハアキツクニト云也但神代豊秋津根ト云テ有ニ三浦安國四細矛千足國五磯輪上秀眞國六玉墻内國已上十四名アルソ吾國ハ始ハ八列也今ハ大和トテ西方ニシイタソ神武天皇東征メ至テ彼列開王道ホト天下各ヲ大和列ト云ソ亦且テ周ト云漢ト云タト自然ニ相合メソ日本訓スルハ義訓也其類多ス

葛原疏云

凡吾國名通倭漢有十三其一云倭國舊說吾邦之人初入漢漢人問謂汝國名如何吾答曰謂吾國耶漢人即取吾字之初訓余之曰倭故東漢書傳曰倭有韓東南大海中依山島為居凡百餘國又唐書列傳曰倭國

古倭奴國也。按讀書倭鳥松切。女王國名。又於鳥切說文云。順。廣韻。慎。貌。增韻。謹。貌。今以兩韻通。則倭順貌。蓋取人心之柔順。語言之諧聲也。二云倭。倭國。此方男女皆黥面。其身故加面字。呼之東漢書曰。安帝永初元年。倭國王師外等獻。對百卒人。三云倭人國。魏志傳曰。倭人國在帶方。東南大海之中。四云耶馬臺國。東漢書注。作耶馬壙。耶馬臺字無意義。借用耶摩止之音耳。後漢書傳曰。大倭王邪馬臺國。五云姬氏國。出室誌和尚識文。晉書傳曰。男女子無大小。悉黥面。文身。自謂。太伯之後。蓋姬氏。周姓。周太王長子。吳太伯讓國。逃荆蠻。斷髮。文身。以避龍蛇之害。而吳。濞。東海本朝俗。比黥面。推警。故稱。太伯之後。則各國曰。姬氏。然吾國君臣。比皆為天神之苗裔。豈太伯之後哉。此蓋附會而言之矣。祖考韻書。姬婦人之義稱。而天照大神。始祖之陰靈。神功皇后中興之女主。故國俗或假借用之。依字不依義也。六云枝桑國。東海中。有枝桑兩幹。同根。日所出處。故借用。七云君子國。三善清行曰。范史稱。吾國曰。君子國。范史則。范舉撰東漢書者。以上七名。和漢通稱。八云豐原。原。千五百。秋之瑞穗國。此神代之本名。其義具下。九云豐秋津洲。神武帝始。余之蜡蛉名。曰秋津。此洲。似此虫形。十云浦安國。蓋取四海女寧之義也。十一云細戈。千足國。謂軍器備足也。十二云磯輪上秀真國。謂吾國秀出諸列也。十三云玉垣內國。謂相國之義也。以上六名。和國。独稱其秋津等名。出神武紀。

中興武將歷世

あふ節用集二出ると  
頼朝始て日本國之  
惣追補使とす  
官者

一第 頼朝 治世 二年  
二第 頼家 五年  
三第 實朝 十七年

四第 頼經 十八年  
五第 頼嗣 八年  
六第 宗尊親王 十五年

七第 惟康親王 廿五年  
八第 久明親王 廿五年  
九第 守邦親王 廿五年

十第 尊雲親王 二年  
十一第 成良親王 三年  
十二第 尊氏 廿五年

十三第 義詮 十年  
十四第 義滿 四年  
十五第 義持 廿九年

十六第 義量 三年  
十七第 義教 十四年  
十八第 義勝 三年

十九第 義政 廿九年  
二十第 義尚 十七年  
二十一第 義植 十八年

二十二第 義澄 十四年  
二十三第 義晴 廿年  
二十四第 義輝 十六年

二十五第 義榮 四年  
二十六第 義昭 五年  
二十七第 信長 十年

二十八第 秀信 三年  
二十九第 秀吉 十五年  
三十第 秀次 九年

三十一第 秀頼 十六年  
三十二第 元和元年 豊臣氏亡

三十三第 家康公 十四年  
三十四第 秀忠公 十六年  
三十五第 家光公 二十年

三十六第 家綱公 五年  
三十七第 綱吉公 八年  
三十八第 家宣公 四年

三十九第 家繼公 四年  
四十第 吉宗公 廿年  
四十一第 家重公 十六年

四十二第 家治公 九年  
四十三第 家齊公 五年  
四十四第 家慶公 十一年

頼朝卿御相續年數凡六百六十有餘年也





特別  
子12  
3643  
202



